

【A1】

**比喩にかかる用法における「もう」の分析
—「もはや」との対比を踏まえて—**

宮田瑞穂（無所属）

本発表では、閔（2019）の「もはや」の分析を参照し、先行研究で十分検討されて来なかった比喩にかかる文脈での副詞「もう」の使用条件を、用例観察を通じて明らかにする。観察の結果、「もう」は「もはや」とは異なり、連辞的隠喻と共にすると不自然であるが、直喻とは共起可能であることが確認された（例：a. スコットはもはや操り人形だった。／ b. ??スコットはもう操り人形だった。／ c. スコットはもう操り人形みたいだった。）。よって、本発表では、直喻と隠喻の意味的な違いを「段階性の有無」と捉え、「もう」は段階の移行を前提とするため、段階性を持たない述語とは共起できないことを主張する。一方、「もはや」は「もう」とは異なり、被修飾部の状態を強調する副詞であると主張する。閔ソラ（2019）『現代日本語におけるカテゴリの周辺例を明示する表現に関する考察』、博士課程論文、名古屋大学。

【A2】

石川県能登地方七尾方言のゼロ格について

米村雪乃（東京外国語大学大学院生）

本発表では、石川県能登地方七尾市で話されている七尾方言において、格助詞を伴わずに文中であらわれる名詞項（以下、「ゼロ格」）について、近隣方言である富山市方言の格に関する記述を行った小西（2016）等を参考に、予察的な発表を行う。

本発表では七尾方言の助詞を伴わない名詞項に着目し、1) 自動詞主語 (S)・他動詞主語 (A)・他動詞目的語 (P) の標示のされ方とその区別について（格配列）と、2) 共通語では「ニ」で標示される項における七尾方言の「ニ」と ϕ の現れ方に関する検討を行う。これらを踏まえ、主語、目的語、ニ格標示され得る項の 3 つの項が ϕ で現れうるが、それぞれの項がどの機能を果たすかが予測可能であることから、主格・対格・与格のほかにゼロ格を立てることを提案する。【参考文献】小西いづみ（2016）『富山県方言の文法』東京：ひつじ書房。

【A3・招待】

日本語の使役形式の地域差—(s)as, -(s)ase を中心に—

大槻知世（静岡大学）

日本語の使役は様々な観点から研究されてきたが、主要な形式の五段「-さす」-(s)as と下一段「-させる」-(s)ase の意味的差異は十分に記述されてきたとは言い難い。しばしば-(s)as は-(s)ase の口語的・方言的変種と説明されるが、高見（2011）は共通語で両者には使役主の被使役事象への関与の強弱に応じて使い分けがあると指摘する。本発表ではこれを出発点に、京阪方言の-(s)as/ -(s)ase の用法を検討する。京阪では-(s)as が無標と見られ、東日本の-(s)ase 選好と対照的である。東の-(s)as の適用範囲の狭さと意味特徴は、生産性の低い形式が直接使役を担う通言語的傾向と一致する。さらに、古態の残存と思われる静岡県中部の「-かす」-(r, s)akas を、使役事象の中の他動性を前景化する使役形式として位置づける。以上から、日本語の使役体系は地域差、歴史的変化、事象構造の捉え方の差異の相互作用により動的に形成されていることを示す。【参考文献】高見健一（2011）『受身と使役—その意味規則を探る—』東京：開拓社。

【A4】

山梨県奈良田方言の終助詞「ニ」の用法と意味機能
—理由の接続助詞からの派生過程に着目して—

阪上 健夫（東京大学大学院生）

本発表では山梨県早川町奈良田方言の終助詞「ニ」の用法と意味機能を明らかにし、理由の接続助詞から終助詞への派生過程を考察する。

奈良田方言の高年層話者を対象とした質問調査の結果、「ニ」は理由の接続助詞としては使いにくく、終助詞として平叙文や意志形による勧誘文に付くことが確かめられた。平叙文の場合は話し手の知識や判断を聞き手に知らせる発話に使え、意志形に付く際は聞き手への勧誘や話し手の意志を知らせる申し出で使える。つまり、「ニ」には〈話し手の知識や判断・意志等を新情報として提示し、聞き手の認識に働きかける〉意味機能がある。

話し手が真と判断する事態を知らせる発話には理由の接続助詞も使えるため、「ニ」の用法は理由の接続助詞と連続的なものから派生したと思われる。一方で現在の「ニ」の用法は意志形に接続するなど、認識への働きかけの意味は残しつつ理由の接続助詞と連続した意味が希薄なものへと広がっている。

【A5】

「V てくれる/あげる」構文における恩恵と動作の受け手の重層構
造が引き起こす習得困難点
—恩恵と動作の受け手の混同・ニ格とノタメニ格の混同において—

李強楠(関西大学大学院生)

本発表は、間接「V てくれる/あげる」構文における認知的な困難さと「リーさんは私に（×.→を）駅まで送ってくれました。」のようなニ格を過剰般化する習得困難点を実証的に検討した結果を発表する。調査の結果、学習者は授受補助動詞の存在下で意味格としての恩恵と動作の受け手とその形式格であるニ格とノタメニ格を正確に区別できておらず、この誤ったニ格使用が上級へと化石化する傾向が確認された。また、この混同の原因是、恩恵の受け手に固有の形式格が従来の記述で明示されていない点にあると推察する。そこで、意味格のレベルで両者を分離し、教育上は「動作の受け手=ニ格」、「恩恵の受け手=ノタメニ格」と明確に区別して指導する方法を提案する。

【A6】

主題のみからなる疑問文について

丹野靖大（東北大学大学院生）

現代日本語の疑問文には「ごはんは？」のような主題のみからなる疑問文（主題疑問文）がある。本発表では、主題疑問文はそれそのものとしてどのような特徴をもつか、主題疑問文の意味・構造はどのようなものであるかを検討する。主題疑問文の特徴としては、(i) さまざまな疑問文として解釈されうるような開放的な問い合わせること、(ii) 一般に疑問文がもつとされる前提命題を含意していないこと、(iii) 助詞をともなった主題からなり、さらにその主題が広義の説明対象であることがその成立のために必要であるということがあげられる。主題疑問文の意味・構造については、主題文が、主題が描かれる段階 1、述部が述べられる段階 2 をもって成立するとする立場に立つとき、主題疑問文は、段階 1 の構造、そのまだ述べられていない述部を不明点とする構造をもち、〈主題として承認された名詞句について、それにまつわる情報を開放的に求める〉という意味をもつ。

【B1】

**日本語における疑似接辞「マンモス」の発達について
—用法基盤モデルに基づく分析—**

角出凱紀（京都大学大学院生）

本発表では、日本語における形態素「マンモス」の使用について共時的・通時的な観点から考察する。当該の「マンモス」は単独で使用された場合（e.g. マンモスの牙）と複合語の左側要素として使用された場合（e.g. マンモス大学）で異なる意味を表すことが先行研究で指摘されているが、このことを実証する証拠は一切提示されていない。また、新聞等で「マンモス化」という表現が少數ながら見つかることも問題点と言えよう。そこで、本発表では、第一に共時的なコーパス調査の結果に基づいて、この先行研究の指摘が妥当であることを実証する。このことは「マンモス」が概略「マンモス+Y」という抽象度の低い構文スキーマで定着していることを示すものである。したがって、第二にこのような構文スキーマの発達についても、通時的なコーパス調査の結果に基づいて用法基盤モデルの観点から考察を行う。

【B2】

**接続助詞「と」の淵源
—同時の意を表す「と等しく」はなぜ「に等しく」でなかったか—**

陳 星宇（名古屋大学大学院生）

接続助詞「と」の源流は平安末期に現れた同時の意を表す「と等しく」にあるとされている。しかし、形容詞「等し」は「に」「と」の両方を承ける。ではなぜ、同時の意を表す接続表現は「に等しく」ではなく「と等しく」であったのか。この問い合わせを検証するため、本発表では平安時代の「{と/に} 比較述語」の使い分けの様相を観察する。その結果、まず、「等し」以外の比較述語では、「に」の例がより一般的であり、「等し」では「に」「と」が用法を問わず使われるが、「と」が全体的に多かった。さらに、「等し」では、「に」は「非修飾用法」に偏り、「と」は「修飾用法」に偏っている。この観察は、同時の意を表す接続表現として「に等しく」が成り立たなかつたという史的事実の背景に説明を与えるだけでなく、「等し」を比較述語の中に位置付けて見ることで、順接条件を表す接続助詞「と」の成立における類語との相違、「と等しく」の特異性も確認できる。

【B3】

複合動詞「～ツクス」の通時的変遷

池田來未（神戸大学）

現代語の「～ツクス」は「皿にあったごはんを食べ尽くした」「彼の著作を読み尽くした」のように、対象範囲を限定し、その範囲内の残余が 0 になるまで動作を網羅的に行うことを表す。一方で、「力を出し尽くした」のように対象となる範囲を限定することが困難で、その残余 0 を表すとは考えにくい例も存在する。本研究では、上代から近代の資料を対象に複合動詞「～ツクス」の用例を調査した。その結果、上代・中古の時点から対象範囲が不明確で、前項動詞で表される程度の甚だしさを表すと考えられる例が複数存在したこと、中近世頃から、対象範囲が明確、あるいは「皆」のような副詞を伴い、範囲内の残余 0 を表す例が増えることが分かった。ここから、発表者は「～ツクス」の基本的な意味を前項の動作の甚だしさであるとして、範囲内の残余 0 は上記のような条件が揃った時に生じると結論づけた。また自他対応や形態的特徴についても検討した。

【B4・招待】

古代日本語における動詞基本形の捉え方
—不完全相か、完成相か、〈未来〉を表すのか—

福嶋 健伸（実践女子大学）

古代日本語の動詞基本形には、不完全相を表すという説がある一方で、完成相を表すこととを示唆する説もある。どちらの研究も、中古和文資料を調査し、同一の方法（用例をもとにした帰納的な方法）で分析したものでありながら、正反対の結論となっている。当該形式の研究は、混乱した状況であるといえる。本発表では、まず、古代日本語の動詞基本形をめぐる諸説を整理し、諸説入り乱れる原因是、テンス・アスペクトの観点から議論していることにあると指摘する。次に、当時の実態を把握した上で、当該形式については、〈現実〉を表すという説が最も妥当であることを述べる。〈現実〉を表すという場合、当該形式が〈未来〉を表す例が問題となるが、資料の底本等の検討を行い、古代日本語の動詞基本形は、基本的には〈未来〉を表さないことを述べる。最後に発表者のこれまでの研究をもとに、どのような変遷を経て現代日本語のような体系になったのかを確認する。

【B5】

[移動領域]補語の助詞標示の変遷—非制御的な移動動詞を中心に—

山下大希（名古屋大学大学院生）

本発表は、非制御的な移動動詞における〔移動領域〕補語の助詞標示の変遷を明らかにするものである。松本(2020)によると、古代日本語では、有境界性をもつ〔通過点〕・〔移動経路〕にのみ助詞ヲが用いられ、〔移動領域〕はニで標示された。他方、制御的な動詞では鎌倉期以降、ヲ標示が拡張したが、非制御的な動詞は室町期においてもニ標示にとどまる。本発表では「流れる・さ迷う・漂う」を対象に、コーパスを用いて通時的推移を検証した。その結果、ヲ標示は「流れる→さ迷う→漂う」の順に拡張したことが判明した。「流れる」では経路性が、「さ迷う」では主語の有生性が拡張の契機となり、両者の影響を受けて「漂う」にもヲ標示が波及したと考えられる。現代語では、こうした意味的連続性を経て「ヲ=移動領域」という新たな体系が成立したことを示唆する。【参考文献】松本昂大(2020)「中古和文における移動動詞の経路、移動領域の標示」『日本語の研究』16-3.

【B6】

ノダ文の「原因・理由」提示用法の変遷について

幸松 英恵（東京外国語大学）

現代語のノダにはさまざまな用法があることが知られているが、その中でも「昨日は学校を休みました。風邪をひいたんです」のような「原因・理由」を提示しているノダが典型とされることが多い。本発表では、近世期（江戸語）のノダ文には上例のようにノダで「原因・理由」を直接提示する文がほとんど存在しなかったことを述べる。発話現場において前提となっている事態（A）があり、その「原因・理由」（B）をノダ文で表現する場合は、「風邪をひいたから休んだのだ」のような「B 理由句 A ノダ」型の表現が選ばれていた。それは、当時のノダ文が名詞文構造を基本としており、時間的・空間的に隔たっている 2 つの事態を「A ハ B ダ」で直接結びつけることができないという性質があったためと考えらえる。さらに、近代になってこの制約が崩れ、「原因・理由」の提示ができるようになった契機について、この近世語ノダの様相を通して仮説を述べる。

【C1】

日本語において抽象格と形態格を区別する意義—無助詞の分析—

坂本瑞生（東北大学大学院生）・山下大希（名古屋大学大学院生）

現代日本語共通語では、格助詞を伴わない「無助詞」の名詞句が一定の環境に限って許される。具体的には、名詞が主題であるか、動詞述語内項である場合に無助詞が許されることが知られる（丹羽(1989), 影山(1993)）。この無助詞の分布制限に対して、本発表では、格付与の統語的メカニズムの点から原理的説明を与えることを試みる。日本語において格は、形態格（格助詞）と抽象格の 2 種が存在すると提案し、名詞句はこのいずれかを付与されなければならないと仮定する。この道具立てのもとでは、抽象格が付与される名詞句に限って無助詞が許されることが予測されるが、この予測によって無助詞の分布制限が適切に導かれることを示す。【文献】影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房／丹羽哲也(1989)「無助詞格の機能」『国語国文』58(10), 38-57.

【C2】

**数量形容詞“多い”と“少ない”の非対称性
—肯定・否定極性形容詞のスケール構造の違いに基づいて—**

包雅梅（華東理工大学）

数量を表す形容詞の“多い／少ない”は連体修飾用法に使用制限が見られるが，“多い”より“少ない”が比較的連体修飾しやすい。中島（2023）は *narrow* は常に「狭い」を含意するのに対し, *wide* はそれだけでは「広い」という意味を持たず中立的であると指摘している。また、包（2025）は “夥しい／わずかだ”は比較基準や対象がなくても“夥しい／わずかだ”の意味が表せ、描写的機能が働くと述べている。本発表では、“少ない”がその類義語類と類似し、比較基準や対象がなくても“少ない”の意味を表す場合があること、またその意味表出は文構造に依拠するところもあることを論じる。論拠として、まず、“多い”と“少ない”は連用修飾用法においても異なる性質を示す。また、“少ない”は連体修飾位置で自動詞の主語や他動詞の目的語の数量を直接表すことができない。かつ、“少ない”が連体修飾する名詞はいくつかの語に集中しており、現れる文にはパターンが見られる。

【C3】

話し言葉における否定ていねい形の選択メカニズム
—一般化線形混合モデルによる検討—

李 依格（大阪大学大学院生）

本発表では、話し言葉に焦点をあて、否定ていねい形の「～ません」「～ないです」の選択メカニズムについて発表する。独話と対話の両方のデータを扱って、一般化線形混合モデルを用いて検討する。モデリングでは、7つの固定効果および1つのランダム効果でモデルを構築する。具体的には、固定効果は、(1) 前接要素、(2) 後続要素、(3) 時制、(4) 引用節、(5) ジャンル、(6) 話し手の性別、(7) 話し手の世代、という7つで、ランダム効果は個々の話し手である。従属変数は、否定ていねい形の選択である。モデリングの結果は、(1) ジャンル・前接要素の影響が大きいこと、(2) 後続要素・話し手の世代・引用節は中程度の影響要因であること、(3) 時制・話し手の性別の影響はほかの要因より弱いこと、(4) ランダム効果がモデルの予測の良さに大きく寄与していること、という4点にまとめられる。

【C4】

談話戦略としての認識のはじめから文末用法の分析—

孫思琦（総合研究大学院大学大学院生）

井戸美里（国立国語研究所）・窪田悠介（国立国語研究所）

本研究は、原因・理由を表さない文末カラを対象とし、その談話的性質を分析することで、カラが談話の進行や認識のはじめをどのように制御するのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、文末カラと談話標識の共起関係に注目し、文末カラを「補足型」「訂正型（1・2）」「転換型」の三種に分類した。本研究ではこの中でも「訂正型」や「転換型」が、話し手が既に解決済みとみなした問題に遡って修正を加える「逆行的応答」や、未提示の知識に新たな焦点を当てる「逸脱的導入」などが行われる環境に現れることを指摘する。これらの環境は、談話において一般的とされる順行的応答構造とは異なる傾向が特徴的である。本研究はこのような観察に基づき、文末カラが談話の展開を制御する標識であることを示し、その機能を QUD 理論を用いて一般化して示す。

【C5】

**非情物主語における再帰的使役表現の成立可能性
—所有傾斜制約の再検討—**

黄 銘君（北海道大学大学院生）

本研究は「目を輝かせる」に代表される、主語と目的語の間に所有関係が認められる再帰的使役表現のうち、非情物主語を検討する。先行研究では非情物への「所有傾斜」適用は限定的とされてきたが、本稿は非情物を「準有情物」として捉え直し、再帰的使役の新たな成立可能性を示す。BCCWJ コーパスを用いた分析の結果、非情物主語においても〈構成要素〉〈性能〉〈付属物〉の三類型が観察され、所有傾斜における〈身体部位・属性・衣類〉と平行的に対応することが明らかとなった。これらは操縦者や行為主体の存在を背景化しつつ、非情物の特性を前景化することで「周辺的な再帰的使役」として成立している。さらに、乗り物・植物・食べ物のように動作・変化・特性を自ら示す主体は擬人化的解釈が誘発されやすい。結論として、本研究は「構成要素→性能→付属物」という準所有傾斜を提案し、有情物と非情物の両者を連続的に捉える体系を提示する。

【C6・招待】

**現代日本語の尺度的累加量化詞について
—類推・添加・最低条件用法の再考—**

大島 デイヴィッド義和（名古屋大学）

本発表では、現代日本語の焦点代替量化詞（とりたて詞）の意味的研究において議論されてきた問題のうち、(i) サエとマデの意味・分布上の対立と (ii) 条件文の前件に現れるいわゆる「最低条件」のサエの機能をとりあげ、論理意味論的な分析を提示する。分析の要点は以下の通りである。(i) 類推用法のサエが「基本命題（自者）が代替命題（他者）と比較して顕著性が大幅に高い」という前提を伝達するのに対して、添加用法のマデは「基本命題と代替諸命題の連言が後者のみの連言と比較して顕著性が大幅に高い」という前提を伝達する。(ii) いわゆる最低条件用法のサエは「後件に対する十分条件となる代替諸命題のうち、前件の基本命題はもっとも実現可能性が高いものである」という前提を伝達する。

【D1】

不明確項指示用法の不定語と指示詞の照応について

松本優（名古屋大学大学院生）

指示詞の文脈指示用法においては、先行詞や指示詞が指す対象の特徴によってコソア系に使い分けが見られる。本発表では、堤(2012)の枠組みに依拠し、先行詞となる名詞句が「何か」等の不明確項指示用法(尾上 1983)の不定語である場合に照応する指示詞の様相について記述する。不定語はその内実が「空欄」であるということから基本的に変項 x を含む名詞句として位置づけられる。変項を介して解釈される名詞句はコ系・ア系ではなくソ系になるという堤(2012)の指摘から、不定語を先行詞に取る指示詞は原則としてソ系指示詞であると予測される。【引用文献】尾上圭介(1983)「不定語の語性と用法」渡辺実編『副用語の研究』pp.404-431, 明治書院/堤良一(2012)『現代日本語指示詞の総合的研究』ココ出版

【D2】

**結果相を表すテアル文における動作主
—動作主不在説の検討—**

新山聖也（筑波大学非常勤研究員）

結果相を表すテアル文の分析には、見えない動作主が存在するという動作主存在説と、動作主が存在しないという動作主不在説の二つの立場が存在する。動作主不在説では、動作主指向副詞と共に起するテアル文がパーフェクト相であると捉え直すことで、結果相を表すテアル文に動作主が存在しないことを主張している。本発表ではこの議論を批判的に検討する。第一に、動作主不在説の議論では、一部の動作主指向副詞を用いた観察しか行われていないため、主張の反例となる例が見過ごされている。第二に、動作主不在説の議論では、動作主指向副詞と共に起するテアル文がパーフェクト相であると主張することになるが、それを支持する観察は得られない。以上の点から、結果相を表すテアル文については、動作主が存在すると考える立場が妥当であることを主張する。

【D3】

「さすがに」の意味・機能の細分化について

周 世超（三重大学特任講師）

「さすがに」は、評価副詞「さすが」の諸形式の一つであり、他の「さすが」「さすがは」「さすがの」「さすがだ」と比べて、より多様な意味と用法を示す。これまでの研究では、その多義性は未だ十分に解明されておらず、体系的整理が求められている。そこで本発表では、「さすがに」を研究対象とし、BCCWJ および朝日新聞クロスサーチから抽出した実例を分析し、その意味的・機能的差異を明らかにすることを目的とする。分析の結果、「さすがに」の用法は、帰結用法、評価用法、判断用法、予測用法、対比用法の五種類に整理でき、それぞれの用法で「予想」「常識」「評価」など異なる意味的側面が前景化することを示した。

【D4】

動詞「終わる」の意味拡張と構文の変化

上田地平（関西大学大学院生）

本発表は、動詞「終わる」が「寝坊して間に合わない。終わった。」のような文章において単独で現れる場合の用法について記述し、「終わる」自身の意味拡張や構文的特徴との関係を明らかにすることを目的とする。X の提供する「高度な検索」機能を用いた用例採集調査や辞書記述から「終わる」の用法の整理を行い、意味拡張の結果「物事がだめになる」という性質的な意味を獲得することと、その物事を表す名詞句が主格として明示されない構文が出現していること、さらにその構文におけるタ形「終わった」の生起が主節に偏ることを確認する。この調査結果を受け、本発表では「主格が顕在しない」「主節以外で使用しがたい」という構文的な制限が当該の「終わった」の単独使用を促していることを主張し、こうして成立した「終わった」が「しまった」や「やった」などの感動詞化した動詞タ形と共に通の特徴を有することであることを論じる。

【D5】

「はといえば／はというと」はいつ使われるのか

張 明（川村学園女子大学）

主題を表す形式として「は」や引用形式の「といえば／というと」に関する研究は多いが、両者を組み合わせた「はといえば／はというと」を対象とした研究はほとんどない。本発表では、「はといえば／はというと」がどのような場面で用いられ、どのような意味用法を持ち、「は」や「といえば／というと」とどのように異なるのかを明らかにする。まず、言語的先行詞の有無を検討し、「はといえば／はというと」は先行詞を必要とし、前文脈に既出の表現を指示することを示す。次に、意味用法の分析から、単なる対比ではなく、既出主題名詞句の再提示を表すことを指摘する。主題名詞句でない名詞句から主題名詞句に切り替え、再提示し焦点を当てる文脈で用いられる。さらに、「は」との比較により、取り立てる事柄の切り替えを強調し、前文脈と異なる事柄への注目を促す表現効果があることを示す。この特性は、使用頻度が低い理由の説明にもつながる。

【D6】

形式名詞の無助詞用法

パリハワダナ ルチラ（京都大学）

本研究では、形式名詞が助詞を伴わずに文に出現する場合について助詞を伴う場合と比較しながら考察した。その一つのパターンとして全体と部分の表し分けが挙げられる。無助詞の「あいだ」は該当事態が期間全体を占めることを表すのに対し、助詞を伴う「間に」は主節の成立を従属節の期間内に起きるものとして描写する。無助詞用法のもう一つの機能に形式名詞「うち」が表す全体における部分の位置づけがある。一方、述語が否定の形をとる文に現れる無助詞の「通り」は否定の作用域外に置かれる。対照的に助詞を伴う「通りに」は否定の作用域内に入る。形式名詞「ほど」は無助詞の形で数量的表現の概括的量やスケールの限界点を表す。無助詞形の出現状況についても、事実的な事態を述語とする従属節（「ため」）、副詞化した表現（「そのうち」）、一語化した形式（「～ごろ」、「こないだ」）、更には硬い文体における出現に大別し、考察した。